

（論文）

新約聖書物語再考—マグダラのマリアの場合

本 多 峰 子

序

20世紀に至るキリスト教の教義や伝説では、マグダラのマリアはしばしば、回心した娼婦との見方をされてきた。この見方によって、福音書のマグダラのマリアについての記述は、どれほど罪深い生き方をしていた人たちであれイエスに出会って救われるとの福音の例として読まれ、数々の「新約聖書物語」あるいはそれに類する文学の中でも、そのような扱いを受けてきた。その結果現在でもまだ、多くの人の心象や教会での説教で、マリアは悔い改めた売春婦のイメージでとらえられていることが多い。筆者が個人的に話をした範囲内でも、何人ものキリスト教徒が、マグダラのマリアを、罪深さのどん底からイエスによって救われた回心者のモデルとして崇敬し、自分も彼女のように救われる、あるいは、救われたいとの思いを明かしている。しかし、今日の聖書学の発達によって、そのようなマグダラのマリア観はもはや成立しないということが分かっている。本論では、一般的なマグダラのマリア像と、今日の新約聖書学が明らかにしたマリア像の齟齬を明らかにし、聖書学的発見をふまえたうえで新約聖書に戻ってそこから読み取れる新たなマリア像を、新約聖書の範囲内で構築することを目的とする。その際本論では、文学としての新約聖書の解釈に基づく「新約聖書物語」やそれに準じた文学作品の中でのマリア像を見直すことに焦点を置き、外典その他のマリアの言動は参考にはしても、本論の再構築そのものの中には組み込まないことにする。

I 新約聖書でのマグダラのマリアについての記述—テキスト

新約聖書でマグダラのマリアが登場している箇所は多くない。実際、イエスの磔刑死の描写の前には、ルカ福音書に一箇所、以下のように記述されているだけである。

8:1 すぐその後、イエスは神の国を宣べ伝え、その福音を告げ知らせながら、町や村を巡って旅を続けられた。十二人も一緒だった。² 悪霊を追い出して病気をいやしていただいた何人かの婦人たち、すなわち、七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼

ばれるマリア、³ヘロデの家令クザの妻ヨハナ、それにスサンナ、そのほか多くの婦人たちも一緒であった。彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた。

マグダラのマリアが次に登場するのは、イエスの磔刑死の時であり、ここでは、マルコ、マタイ、ヨハネの記述に以下のように名前が挙げられている。ルカによる福音書の並行箇所からマリアの名前が消えていることが気づかれる。

マルコ

15:37 しかし、イエスは大声を出して息を引き取られた。³⁸すると、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた。³⁹百人隊長がイエスの方を向いて、そばに立っていた。そして、イエスがこのように息を引き取られたのを見て、「本当に、この人は神の子だった」と言った。⁴⁰また、婦人たちも遠くから見守っていた。その中には、マグダラのマリア、小ヤコブとヨセの母マリア、そしてサロメがいた。⁴¹この婦人たちは、イエスがガリラヤにおられたとき、イエスに従って来て世話をしていた人々である。なおそのほかにも、イエスと共にエルサレムへ上って来た婦人たちが大勢いた。

[…]

15:46 [アリマタヤの] ヨセフは亜麻布を買い、イエスを十字架から降ろしてその布で巻き、岩を掘って作った墓の中に納め、墓の入り口には石を転がしておいた。⁴⁷マグダラのマリアとヨセの母マリアとは、イエスの遺体を納めた場所を見つめていた。

マタイ

27:55 またそこでは、大勢の婦人たちが遠くから見守っていた。この婦人たちは、ガリラヤからイエスに従って来て世話をしていた人々である。⁵⁶その中には、マグダラのマリア、ヤコブとヨセフの母マリア、ゼベダイの子らの母がいた。[…]

27:59 [アリマタヤの] ヨセフはイエスの遺体を受け取ると、きれいな亜麻布に包み、⁶⁰岩に掘った自分の新しい墓の中に納め、墓の入り口には大きな石を転がしておいて立ち去った。

⁶¹マグダラのマリアともう一人のマリアとはそこに残り、墓の方を向いて座っていた。

ルカ

23:46 イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」こう言って息を引き取られた。⁴⁷百人隊長はこの出来事を見て、「本当に、この人は正しい人だった」と言って、神を賛美した。⁴⁸見物に集まっていた群衆も皆、これらの出来事を見て、胸を打ちながら帰って行った。⁴⁹イエスを知っていたすべての人たちと、ガリラヤから従って来た婦人たちとは遠くに立って、これらのことを見ていた。[…]

23:53 [アリマタヤのヨセフが] 遺体を十字架から降ろして亜麻布で包み、まだだれも葬られたことのない、岩に掘った墓の中に納めた。⁵⁴その日は準備の日であり、安息日が始まるようとしていた。⁵⁵イエスと一緒にガリラヤから来た婦人たちは、ヨセフの後について行き、墓と、イエスの遺体が納められている有様とを見届け、⁵⁶家に帰って、香料と

香油を準備した。

ヨハネ

19:25 イエスの十字架のそばには、その母と母の姉妹、クロパの妻マリアとマグダラのマリアとが立っていた。26 イエスは、母とそのそばにいる愛する弟子とを見て、母に、「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です」と言われた。19:27 それから弟子に言われた。「見なさい。あなたの母です。」そのときから、この弟子はイエスの母を自分の家に引き取った。

彼女が最も大きな役割を果たすのはイエスの復活顕現の場面である。これは、マルコ、マタイ、ルカ、ヨハネ福音書で以下のように記述されている。

マルコ

16:1 安息日が終わると、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメは、イエスに油を塗りに行くために香料を買った。2そして、週の初めの日の朝ごく早く、日が出るとすぐ墓に行った。3彼女たちは、「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」と話し合っていた。4ところが、目を上げて見ると、石は既にわきへ転がしてあった。石は非常に大きかったのである。5墓の中に入ると、白い長い衣を着た若者が右手に座っているのが見えたので、婦人たちはひどく驚いた。6若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。7さあ、行って、弟子たちとベトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。」8婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。9〔イエスは週の初めの日の朝早く、復活して、まずマグダラのマリアに御自身を現された。このマリアは、以前イエスに七つの悪霊を追い出していただいた婦人である。10マリアは、イエスと一緒にいた人々が泣き悲しんでいるところへ行って、このことを知らせた。11しかし彼らは、イエスが生きておられること、そしてマリアがそのイエスを見たことを聞いても、信じなかった。〕〔6:9-11は後世の加筆と考えられている〕

マタイ

28:1 さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリアともう一人のマリアが、墓を見に行った。2すると、大きな地震が起こった。主の天使が天から降って近寄り、石をわきへ転がし、その上に座ったのである。3その姿は稲妻のように輝き、衣は雪のように白かった。4番兵たちは、恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった。5天使は婦人たちに言った。「恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、6あの方は、ここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。さあ、遺体の置いてあった場所を見なさい。7それから、急いで行って弟子たちにこう告げなさい。『あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。そこでお目にかかれる。』確かに、あなたがたに伝えました。」

⁸ 婦人たちは、恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。⁹すると、イエスが行く手に立っていて、「おはよう」と言われたので、婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。¹⁰イエスは言われた。「恐れることはない。行って、わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる。」

ルカ

24:1 そして、週の初めの日の明け方早く、準備しておいた香料を持って墓に行った。²見ると、石が墓のわきに転がしてあり、³中に入っても、主イエスの遺体が見当たらなかった。⁴そのため途方に暮れていると、輝く衣を着た二人の人がそばに現れた。⁵婦人たちが恐れて地に顔を伏せると、二人は言った。「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。⁶あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出しなさい。⁷人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている、と言われたではないか。」⁸そこで、婦人たちはイエスの言葉を思い出した。⁹そして、墓から帰って、十一人とほかの人皆に一部始終を知らせた。¹⁰それは、マグダラのマリア、ヨハナ、ヤコブの母マリア、そして一緒にいた他の婦人たちであった。婦人たちはこれらのことを使徒たちに話したが、¹¹使徒たちは、この話がたわ言のように思われたので、婦人たちを信じなかった。¹²しかし、ペトロは立ち上がって墓へ走り、身をかがめて中をのぞくと、亜麻布しかなかったので、この出来事に驚きながら家に帰った。

ヨハネ（マリアが全般に登場し、中心となっている）

20:1 週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。²そこで、シモン・ペトロのところへ、また、イエスが愛しておられたもう一人の弟子のところへ走って行って彼らに告げた。「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません。」³そこで、ペトロとそのもう一人の弟子は、外に出て墓へ行った。⁴二人は一緒に走ったが、もう一人の弟子の方が、ペトロより速く走って、先に墓に着いた。⁵身をかがめて中をのぞくと、亜麻布が置いてあった。しかし、彼は中には入らなかった。⁶続いて、シモン・ペトロも着いた。彼は墓に入り、亜麻布が置いてあるのを見た。⁷イエスの頭を包んでいた覆いは、亜麻布と同じ所には置いてなく、離れた所に丸めてあった。⁸それから、先に墓に着いたもう一人の弟子も入って来て、見て、信じた。⁹イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかったのである。¹⁰それから、この弟子たちは家に帰って行った。¹¹マリアは墓の外に立って泣いていた。泣きながら身をかがめて墓の中を見ると、¹²イエスの遺体の置いてあった所に、白い衣を着た二人の天使が見えた。一人は頭の方に、もう一人は足の方に座っていた。¹³天使たちが、「婦人よ、なぜ泣いているのか」と言うと、マリアは言った。「わたしの主が取り去られました。どこに置かれているのか、わたしには分かりません。」¹⁴こう言いながら後ろを振り向くと、イエスの立っておられるのが見えた。しかし、それがイエスだとは分からなかった。¹⁵イエスは言われた。「婦人よ、なぜ泣いているのか。だれを

捜しているのか。」マリアは、園丁だと思って言った。「あなたがあの方を選び去ったのでしたら、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの方を引き取ります。」¹⁶ イエスが、「マリア」と言われると、彼女は振り向いて、ヘブライ語で、「ラボニ」と言った。「先生」という意味である。¹⁷ イエスは言われた。「わたしにすがりつくのはよしなさい。まだ父のもとへ上っていないのだから。わたしの兄弟たちのところへ行って、こう言いなさい。『わたしの父であり、あなたがたの父である方、また、わたしの神であり、あなたがたの神である方のところへわたしは上る』と。」¹⁸ マグダラのマリアは弟子たちのところへ行って、「わたしは主を見ました」と告げ、また、主から言われたことを伝えた。

Ⅱ 文学でのマグダラのマリアの描写の例

1 遠藤周作

カトリック作家の遠藤周作は、イエスに出会う前のマグダラのマリアと彼女の回心を次のように思い描いている。

彼女は悪の世界、闇の世界から、信仰の世界、まひるの世界へと動きまわった女です。 […] 闇の世界の底の底までおちながら、彼女は決して絶望しなかった。なぜなら絶望ほど大きな罪はないからです。絶望しなかったために彼女は新約聖書のなかでも最も人間的な情熱的な女性としてほくたちの目にうつるのです。¹

マグダラのマリアはその若い時代、たんなる女ではなかったのです。普通の女のようにただ弱い、弱いのが故に時として小さな罪をおかしてしまう女ではなかったのです。彼女はもっと怖い、すさまじい悪の業火に身をやかれていたようだ。そのことは「七つの悪霊のその身よりい出たる」という力の描写がはっきりと示している。

七つの悪霊—当時の人の素朴な感覚からいえば、眼をそむけるような罪の泥沼に堕ちた人間は「悪霊にとりつかれたのではないか」とも見えたにちがいません。それほどマグダラのマリアが当時、送っていた生活は普通の人間からみても怖いほど破廉恥な淫乱なものだったのでしょう。²

彼女は人々の眼から見ても「七つの悪霊にとりつかれた」とうつるほど、性急な熱情的な性格の持ち主だったようです。熱情的と書くと語弊があるかもしれませんが—しかし我々の中には善をなすにも消極的であるが故に、悪をなすのにも消極的な人間がいるのです。 […] だが、マグダラのマリアは、このようなタイプの女ではなかった。³

彼女は世間の人々のこうした意気地のない事なかれ主義に本能的な嫌悪をもっていた娘だったのでしょう。 […] 少なくとも罪を行なうということには、一時的な陶酔や熱情がよびさまされる […] 彼女は無気力な日常生活よりはこの情熱のほうを選んだのでした。

けれども罪から罪、肉慾から肉慾の毎日を送っていくうちに彼女の心にはポッカリと

うつろな穴が広がるのでした。⁴

キリストとこの罪の女の出あい。劇的なその場面がどのようなものだったかはよく等にはわかりません。[…] だが、[…] 突如として「七つの悪霊を追い放してもらった」彼女の積極的な歓喜、その歓喜に顔のほうを眼にうかべたいのです。[…]

悪に対しても必死だった彼女は一たび、この生の指針がきまるともはや脇目もふらずキリストのあとをついて歩いた。⁵

遠藤のこの描写は、マリアを「肉欲」の罪にとらわれた娼婦と見る典型的な例である。

2 川村員子「マグダラのマリア愛と情熱と信仰の女」

キリスト教徒の想像した若き日のマグダラのマリアのもう一つの例として、遠藤周作の『聖書のなかの女性たち』と同年に出た川村員子のマリア像を紹介する。

なぜマリアは「七つの悪霊につかれた女」といわれるようになったのでしょうか。

彼女は、その呼び名が示すようにガリラヤ湖のほとりの港町、マグダラに生まれ育ちました。[…] マリアは、このマグダラの良家の娘として、何不自由なく育ちました。生まれつき目鼻立ちがはっきりときわだって美しかったように、その性格も激しく情熱的でした。正直で、自分を偽れない性格でしたから、なんでも思ったことは恐れずためらわず表にあらわしました。現代だったら、マリアは個性的で魅力あふれる女性として、自由なはつらつとした人生を送ることができたでしょう。

しかし、当時のイスラエルでは、女の人の地位はきわめて低かったので、マリアはいたるところで障害にぶつかなければなりませんでした。彼女は何人かの男性に恋をしましたが、そのすべてにつまずき、破れました。好きだと思うと、感情をかくしきれないマリアの正直さ、大胆さに、世間の目をはばかる男はたじたじとなって、やがてマリアから逃げていってしまうのです。しかも、いつの間にかマグダラ中に悪いうわさが広まっていました。

「あの女は、怖ろしい悪霊につかれている」

「そうだ。それもひとつやふたつじゃないね。七つの悪霊にとりつかれているよ」

人々はマリアを避け、マリアを見ると急いで家の中にかくれるようになったのです。多感なマリアは見も心も傷つきました。[…] 見るかげもなく青ざめてやせ細り、このままでは死を待つばかりと思われました。そんなとき、マグダラの町ヘイエス様がおおいになったのです。[…]

イエス様のお答えは意外なものでした。

「この人の病気は、悪霊のしわざではない。魂が傷ついて体が弱っているだけだ」[…] もうなにも心配することはない。神様があなたの心の傷をすっかりいやしてくださるのだから」

イエス様は、うなだれているマリアの頭に手をおいて、天を仰ぎ、力強い声で祈ってくださいました。[…] 傷はみるみるいやされていきました。

[…] マリアはこのとき、今まで想像もできなかった全く新しい人格を持つ男性に出あっ

たのでした。⁶

これは、マリアが裕福な家庭の出であった、というような創作を含み、かなり自由に描いているが、やはり、彼女を性的に奔放な女性として描く路線にある。

3 「ジーザス・クライスト・スーパースター」のマグダラのマリア

小説ではないが、非常に印象的にマグダラのマリアを回心した娼婦として描いているもう一つの例が、最初ブロードウェイの舞台上で上演され（1971年初演）、映画化された（1973年）ロック・オペラ『ジーザス・クライスト・スーパースター』である。このミュージカルの中で、マリアはイエスを愛し慕う女性として描かれているが、イエスに対する自分の複雑な気持ちを自身理解することができず、次のように歌っている。

私は分からない、彼をどのように愛せばよいのだろう。
どうしたらよいのか、どうすれば彼の心を動かすことができるのか。
私は変わってしまった。そう、本当に変わってしまった。
この数日の
私自身を振り返ると
わたしは何か別人のよう。

このことをどう理解すればよいのだろう
分からない、なぜ彼が私の心を動かすのか、
彼は男
単なる一人の男に過ぎない
以前にはあれほど多くの男と
あらゆる仕方で
関係していた私なのに、
彼だって、もう一人の男に過ぎないはずなのに […]
もし彼が私を愛していると言ったら
私は戸惑い、怖くなってしまおうだろう。 […]
私は彼を愛している。⁷

彼女はイエス集団の中では、イエスの教えを学ぶ弟子というよりもむしろ、イエスへの自分の思いを隠して彼の身の回りの世話をする女性として描かれている。このミュージカルは、今日でもまだ、日本でも舞台上演が続けられており、特に新約聖書のテキストそのものを読むことの少ない日本の聴衆には、マグダラのマリアのイメージ形成に大きな影響を与えていると考えられる。

Ⅲ マグダラのマリアの娼婦のイメージはどこから来ているのか。

上記の遠藤周作や川村貞子の解釈からも明らかなように、マグダラのマリアが娼婦あるい

は、性的に放埒な女性であったとのイメージは「七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリア」(ルカ 8:2) との福音書の記述から導き出されたものである⁸。この見方には、ローマ教皇グレゴリウス 1 世 (在 590-604) が 591 年ごろ行った説教の影響が強いと考えられるが、そこでグレゴリウス 1 世は、マリアに憑いていた 7 つの悪霊を、「あらゆる罪」特に肉欲を含む 7 つの大罪と同定し、彼女が娼婦であったとしている⁹。グレゴリウス 1 世は、マグダラのマリアとルカ 7:36 以下の「罪深い女性」とを混同しているなどの誤りをおかしており、彼の見方は現在ではもはや教会の公式な見解とはなっていない。しかし、小説や説教、映画では、今日でもまだ、マグダラのマリア=改悛した娼婦、のイメージは強い。

「七つの悪霊を追い出していただいた」との表現は、しかし、本来、売春はもとよりいかなる罪とも無関係であったと考えるべきである。福音書でも、また、後のタルムードでも、サタンが人間を罪に誘惑するとのモチーフはあっても、悪霊が人に罪を犯させるとの思想はない。むしろ 1 世紀の民間信仰では、悪霊によって生じるのは、狂気や病である。タルムード中のあるラビは、「悪霊の数はわれわれ [人間] の数よりも多く、われわれを取り囲んでいる [...] われわれには誰にでも、自分の右に 1000 の悪霊が、左に 1000 の悪霊がいる」と言っている。修学生の講義がだめになるのも、ひざが弱るのも、学者の衣服が擦り切れるのも悪霊のせいである (Berachoth 6a)。

これらの悪霊にはそれぞれ役割があり、ほとんどあらゆる災厄が彼らの仕業であり得た。タルムードでは、多くの問題に多様な見方が出されており、病気の原因についても、さまざまに考えられているが、重い皮膚病を引き起こす「レプラの悪霊」があり、食べ物の上を飛んでいるのが目撃されたり (Kethuboth 61b)¹⁰、眼を見えなくする悪霊がいると考えられ、それを追い払う呪いが教えられたりしている (Pesachim 112a)。狂気は、悪霊に憑かれているためと見られる代表的な例であるが、その症状によって、夜に走り出る、もらったものを壊すなどの場合は狂犬病の兆候と見られることもある (Chagigah 3b)。それに対し、悪霊に憑かれた者の特徴的な行動は、墓に寝泊りする (不浄な場を住処とする)、自分の衣服を引き裂くなどである (Chagigah 3b)。特に月の夜には月の影響でか、あるいは悪霊の活動が月のもつて盛んになるために狂気が起こると考えられた (Pesachim 112b)¹¹。癲癩もしばしば悪霊によって起こると考えられた。

この悪霊たちが、穢れと結びついて考えられることもある。1 例だけではあるが悪霊を「穢れた霊」と呼ぶ例も見出される (Sanhedrin 65b)。

しかし、タルムード中の用例では悪霊はほとんど、「罪」(英訳では sin) と結びつけられてはいない。リリスという女性の悪霊が男性を誘惑するとの伝承が入っている (Sabbath 151b) が、それはむしろ例外的で、悪霊は人に罪を犯させる者ではない。人を誘惑したり悪行をさせるのは、サタンであり、このサタン自身は直接病気を引き起こしたりすることはない。タルムードにおいては罪を引き起こすもの (サタン) と病気を引き起こすもの (悪霊) は分離しているのである。タルムードはイエスの後代 (ミシュナが紀元 200 年頃までに¹²、ミシュナへの注解ゲマラの部分を含めた部分はパレスチナとバビロニアのアモライーム派のラビたちによって 3-5 世紀に成立したとされる¹³) であるが、ミシュナの部分が二世紀の終わりごろまでに成文化されていることを考えれば、イエスの時代にここで表されている民間信仰と大きく異なる見方がなされていたということは考えにくい。むしろ、マグダラのマリアが「七つの悪霊を追い出してもらった」ということは、彼女が肉体的あるいは精神的な病気を多数、

しかも重篤に患っていたものをイエスによって癒されたと考えるべきであろう。特に、新約聖書では、イエスによる悪霊祓いが6回あるが（マルコ 1:23-26 [並行ルカ 4:33-35]、マルコ 5:1-15 [並行マタイ 8:28-34/ルカ 8:27-35]、マルコ 7:24-30 [並行マタイ 15:21-28]、マルコ 9:17-29 [並行マタイ 17:14-18/ルカ 9:38-43]、マタイ 9:32-33; マタイ 12:22)、そこでの悪霊憑きはどれも、狂気やけいれんの発作を伴う癲癇のような症状を示し、売春や姦淫はもとよりいかなる罪とも結びつけられてはいない。それにもかかわらず、後世の誤った解釈の論理は、「7つの悪霊」とはよほどの大罪のことであろう、と推論し、そこから、マグダラのマリアは娼婦だったのだとの誤った結論を引き出し、そこから誤ったマグダラのマリア娼婦像を生み出したのである。

これは、悪霊を罪と結びつける偏見による理論である。新約当時の悪霊観をふまえてみれば、マグダラのマリアは、7つの病気、あるいは非常に重い神経症状を伴う病気をイエスに癒されたと考えるべきであり¹⁴、悪霊から娼婦像を導き出すことは無理である。

ただし、彼女が社会から疎外され冷たい目で見られていたことは、十分あり得る。当時悪霊はしばしば穢れた霊と呼ばれ（マルコ 1:23; 5:2、ルカ 4:33 など）、悪霊に憑かれたと見られた者は、神経症などの症状そのものつらさだけでなく、穢れとして共同体の人々に忌避される苦しみも味わっていたと考えられる。その苦しみから、イエスとの出会いによって、彼女は救われたのであろう。

IV マグダラのマリアのイメージの歪曲—使徒職の剥奪

イエスの受難と復活の物語でマグダラのマリアが果たす役割は顕著である。イエスが逮捕された時、男性弟子たちはイエスを見捨てて離散した。しかし、女性弟子たちはイエスを最後まで見守っていたことがすべての福音書で記されている。共観福音書（マルコ、マタイ、ルカ）とヨハネ福音書の両方で、イエスの墓が空っぽになっていたことを最初に発見するのは女性たちであり、挙げられている女性たちの名前は福音書間で多少異なっているが、マグダラのマリアはそのすべてで言及されており、しかも、マルコとマタイとルカでは最初に言及されている。マグダラのマリアは、イエスの埋葬についてゆき、他の者たちが立ち去ったあとでも墓を見つめている。安息日があけて、イエスの体に葬りの香油を塗りに行くのも彼女ら女性たちである。そして、イエスが復活したことを一番最初に知り、復活の知らせを他の弟子たちに知らせに行くように派遣される最初の間も彼女たちである。ヨハネ福音書では、復活のイエスとの最初の出会いをしたただ一人の女性としてこのマリアは描かれている。ヨハネ福音書と共観福音書という複数の系列の資料にマリアが最初の目撃者かつ証人として見出されることは、マリアが実際にイエスの復活の最初の目撃者であった可能性が大きい。加えて、女性の証言が証言としての有効性を認められていなかった時代に—実際、ルカ福音書によれば、婦人たちが復活を告げるが、弟子たちはそれをくだらぬおしゃべり、たわごとだとみなして、彼らは自分自身が復活したイエスを見るまでは信じない—、このような出来事を初代教会が捏造して伝え広める利点はなかったことから、これが本当であったことである可能性が大きい。

それでも、後世にマグダラのマリアが第一使徒として描かれることがこうも少ない理由は何であろうか。

20世紀の後期から、フェミニスト神学者たちを中心とする研究者によって明らかにされたのは、マグダラのマリアを初めとする女性弟子たちがイエスの時代に使徒の役割を果たしていた事実が後世には伝えられず、ローマの父権制社会に適合して教会も男性中心になって行った経過である。マグダラのマリアは、伝承におけるこの使徒職の剥奪が最も際立っている例であろう。おそらく、マグダラのマリアは、イエスの墓から離れなかったほどにイエスを愛していただけではなく、イエス運動のグループの中では中心的な弟子であり（彼女はイエスを「先生」（ヨハネ 20:16）と呼んでいる）、イエスの近くにおり、それゆえ、復活の知らせを弟子たちに伝える使徒たちへの使徒とさえもされたのであろう。

A・G・ブロックが指摘するように、パウロやペトロ書簡の著者は自らの書簡において自分の使徒職の正当性を根拠付けるために、1) 復活したキリストの顕現を目撃していること、2) キリストのメッセージを伝えよと言う神からの召命または委託を受けていること、の2つを挙げている（cf. ローマ 1:1、1コリント 1:1、2コリント 1:1、ガラテヤ 1:1、エフェソ 1:1、コロサイ 1:1、1テモテ 1:1、2テモテ 1:1、テトス 1:1、1ペトロ 1:1、2ペトロ 1:1）¹⁵。この基準からすれば、ヨハネによる福音書などに記されているマグダラのマリアのキリスト顕現体験は、彼女を第一の使徒とするのに十分である。マルコやマタイに記されている女性たちの顕現体験も、キリスト自身ではなく天使によるキリストのメッセージの委託ではあるが、明確に、復活の知らせを伝えることを委託するものであり、彼女たちに使徒の役割を与えている。このことが、後世にペトロその他の弟子たちとの競合関係を生み出すことになり、マグダラのマリアはその関係においてペトロたちに負けたのであろう。

マグダラのマリアを含めた女性たちの重要性を覆い隠し小さく見せようとする動きは、マルコ福音書を用いて書かれたとされるルカ福音書にすでに現れており、この福音書では、女性たちの役割を弟子集団の支援者にするだけでなく、イエスの十字架刑を見守っていた人々を、マルコ福音書の「マグダラのマリア、小ヤコブとヨセの母マリア、そしてサロメ」（15:40）から、「イエスを知っていたすべての人たちと、ガリラヤから従って来た婦人たち」（23:49）に変更し、マリアの名前を伏せると同時に、見守っていた人々に他の「すべての人」を加え、男性弟子たちをも含めるように改変している。（理屈からすれば、ガリラヤから従ってきた婦人たちは「イエスを知っていたすべての人たち」に含まれるはずなので、「すべての人たちと、ガリラヤから従ってきた婦人たち」というのは、おかしい。この不整合は、ルカが、女性たちの列挙を「ガリラヤから従ってきた婦人たち」に変更した上で「イエスを知っていたすべての人たち」を加筆したためであろう）。さらに、ルカでは、ガリラヤから来た女性たちが、イエスに仕える（διακονέω）のも、弟子たちがイエスに仕えるのとは異なり、経済的に支援するというような形でのこととなっており、しかも、「イエスに」仕えたというのではなく「一行に」仕えたとなっており、あたかもイエスの男性弟子集団を支える役割をあてられていたかのように描かれている（8:1-3）。

マリアの役割を低く見せる同様の操作はヨハネ福音書にも見える。「週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。そこで、シモン・ペトロのところへ、また、イエスが愛しておられたもう一人の弟子のところへ走って行って彼らに告げた。『主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません。』そこで、ペトロとそのもう一人の弟子は、外に出て墓へ行った。」（20:1-3）とあるこの描写では、あたかも、マリアは墓をふさぐ石が取り除

けてあることだけを確かめてペトロのところに告げに行き、彼にその状況を確認してもらい手を打ってもらおうとしているかのようであるが、『主が墓から取り去られました』との彼女の言葉から、おそらく彼女は墓の中ものぞいて、そこにイエスの体がないことも確かめてから彼らのところに走ったのであろう。しかし、ヨハネの記述ではあたかも、ペトロと共に走った弟子が最初の目撃者であり、続いて到着したペトロが最初に墓の中に入って確かめた人間であるかのような印象を受ける。これは、ふたりの男性弟子たちに第一目撃者の資格を与えたい操作ではないかと思われる。

このような書き方がおそらく意図的であり、初代教会の時代にマグダラのマリアとペトロとの間で使徒職の権力争いの競争あるいは対抗関係があったためであることは、外典文書からもうかがわれる¹⁶。二世紀の『マリアの福音書』¹⁷では、マグダラのマリアが弟子たちに、恐れと不安に負けずに福音を宣べ伝えるように奨励する（9:10-20）。しかし、彼女が自分の受けた幻の中でのキリスト顕現について語ると、ペトロとアンデレは、キリストが男弟子に現れなかったのに、一人の女であるマグダラのマリアに現れたのかと、彼女の幻の真実性に疑問を投げかける。マリアは怒って、自分は幻を発明したのでもなければ救い主について嘘をついたのでもない、涙しつつ主張する。レビがマリアを弁護するために来て、ペトロを咎める（17:10-19:5）。

三世紀の「ピステイス・ソフィア」では、弟子たちがイエスに質問をするとき、マグダラのマリアが一人で大部分の質問をしてしまい、ペトロがそれに対し、彼女は他の男弟子たちの質問の機会を奪っていると不満を述べている（Ch.36）¹⁸。

V 聖書の記述から読み取れること

以上の考察から、マグダラのマリアについて現在聖書から読み取ることができるのは、以下のことであると言えよう。

- 1) 彼女はマグダラの出身であり、イエスがガリラヤ宣教を行っていた早い段階でイエスに重い病気、おそらく神経性の病気を癒してもらい、イエスの弟子となった。
- 2) 彼女は、イエスが逮捕されて男性弟子たちが離散してしまったあともイエスについて行き彼の刑死を見届けている。
- 3) 彼女は、アリマタヤのヨセフがイエスの死体を引き取って埋葬した時にもついて行き、他の埋葬者が去ったあとも墓を見守っていた。
- 4) 彼女は、安息日を誠実に守るユダヤ教徒である。
- 5) 安息日が明けてすぐに、彼女はイエスに香油を塗ろうとして他の女性弟子たちと共に墓に行き、墓が空であることを発見する。
- 6) 彼女は、墓が空になっていることをペトロその他の弟子たちに告げに行く。
- 7) 彼女はキリストの復活顕現を体験したおそらく最初の弟子であろう。

また、イエスが極めて重い政治犯の処刑方である磔刑という極刑で死んだにもかかわらず、彼女が、イエスの身近な者であることを明らかにすることを恐れず（他の男性弟子は恐れて身を隠した）イエスの刑死とその後も彼を離れず、塗油という行為をイエスの死体に施そう

としたこと、それも、人目をはばからずそうしようとしたことは、彼女の勇気と断固とした行動力を示す。

また、ヨハネによる福音書で、彼女が復活のイエスに出会い、イエスに「マリア」と言われて、「ラボニ」（先生）と答えたことは、彼女がイエスと恋愛関係でつながっていたのではなく、師弟関係を保っていたことを示す。この状況でとっさの返事として、もし、彼女がイエスの愛人あるいは妻であれば、名前で呼ばれた彼女は「イエス」と名前で呼び返したであろうからである。彼女がイエスにすがりついたことは一新共同訳で「わたしにすがりつくのはよしなさい」と訳されているのは、言語の意味から言うと、すでにすがりついているのをやめなさい、とのことである—イエスを「師」として敬愛する気持ちと、死んだと思っていたイエスが現れた喜びと、それが消え去るのではないかとの恐れの混じりあった気持ちを表していると見るべきである。彼女は、抱きつくというような行動ではなく、あくまでも敬愛する師に対するにふさわしいすがりつく（マタイによる福音書によれば、イエスの足を抱く）という行為によって、復活のイエスが幻ではないことを確かめ、彼を二度と失うまいとしたのである。その愛情に性的な恋愛感情が入っていたかどうかは、推測と想像の域から抜け得ないであろう。

マグダラのマリアが娼婦だったのでもなく、イエスの弟子の一人であったことは、聖書学的にはもはや確立している。しかし、日本での一般的イメージは、現在の聖書学の成果とははるかに乖離していると言えよう。この乖離は、この後、彼女について書かれる一般書や教会での説教その他での扱いによって正してゆくことが必要である。

ここから、マリアについての詳細な聖書物語を書くことは、本論の範囲を超えることになるが、この考察に基づくマグダラのマリア物語は、遠藤周作や川村貞子の描くようなマリアとは異なるものとなろう。また、聖書物語は、4つの福音書を統合した形にならざるを得ず、あえてそれを行おうとすることで、各福音書間の相違や異なる生活の座を重視する聖書学とは目指すものが異なることも必至である。聖書学では許されない調和の試みも導入せざるを得ない。福音書間には矛盾もあるために、すべての福音書に忠実な調和的物語を構築することは不可能だからである。マグダラのマリアの物語の場合も、たとえばマルコでは女性たちが天使の顕現を受け、ヨハネでは、復活のイエスがマグダラのマリアとの一対一の出会いをしている点では、統合は不可能であり、各々の物語の作り手が選択と想像力で一つの話に作り上げるしかない。しかし、それでも、聖書学的に証明された過ちや時代背景などを加味して、4つの福音書から読み取れるあらすじのようなものとして、ここでは一つの短い例を試みておきたい。

Ⅵ マグダラのマリアの物語（試案）

マリアはもう長いこと心身ともに疲れ切った状態に苦しんでいた。自分の気持ちがコントロールできず、恐怖や怒りや悲しみに襲われ、狂気にとりつかれたようにふるまってしまう自分をどうしようもなかった。周りの者たちは彼女が悪霊に憑かれていると言う。自分でもそのように思えることがある。もうどうしようもない。自分で自分がわからない…。悪霊に憑かれている彼女を、穢れていると言っているののしったり避けたりする人たちもいる。彼女は、

もう、人との普通の生活ができなくなっていた。当たり前の人間として扱ってもらえずにさえできなくなっていた。

そのとき、彼女はイエスと出会った。イエスは、彼女に憑いていると思われていた悪霊を追い払い、彼女の心の平安を取り戻してくれた。その時、彼女は、このイエスこそが救い主メシアであると確信した。そしてそれ以降、彼につき従い、彼の教えに耳を傾け、イエスの弟子集団の働きを助け支える中枢メンバーの一人として働くようになったのである。

そのイエスが逮捕され、当時の政治的、宗教的権威に逆らって、神への冒瀆を行ったとのぬれぎぬを着せられて死罪の判決を受け、十字架につけられたとき、イエスに従っていた弟子たちの多くは、イエスの仲間であるということで自分の身が危うくなることを恐れて逃げてしまった。しかし、マリアをはじめとする女弟子たちの多くは、彼の死を見守り続けた。ひと時も、目を離すことなどできなかったのである。彼が葬られ、他の人々が墓を去った時点でさえも、彼女は墓の前に残り、彼の葬られたその墓を見つめ続けていた。

安息日がなかったならば、すぐにでも、マリアはイエスの死体に葬りの香油を塗りに行ったであろう。けれども、イエスがヤハウェに忠実に従うユダヤ人であったのに従い、マリアも、ヤハウェの定めに従って、はやる気持ちを抑えて安息日が明けるのを待った。そして、夜が明けるとすぐ、他の婦人たちとともにイエスの墓に走ったのである。

しかし、そこで彼女が見たのは、墓をふさいでいた石が取り除けられ、イエスの体の代わりに彼を包んでいた亜麻布だけが残された空虚な墓であった。驚き、誰がイエスを取り去ったのかと悲しみ思いめぐらす彼女に、天使が現れ、このように告げる。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。さあ、行って、他の弟子たちにこのことを告げなさい。」マリアたちは走ってペトロたちにこのことを告げに行った。

ペトロと弟子たちは墓に行き、墓が空になっていることを発見したが、その意味はわからなかった。

マリアも、このことの意味がよくわからなかった。イエスの墓に戻って、いないとわかっているのに、彼が横たわっていた墓の中をのぞかずにはいられなかった。もしかしたら、目の錯覚だったかもしれない、イエスの体があるかもしれない。そうでなければ、誰かが彼を取り去ってしまったのかもしれない。彼女は、涙が止まらなかった。殺されてしまっただけでなく、体まで取り去られるなんて、あまりにひどすぎる。そう思ってもう一度墓の中をのぞいてみると、イエスの遺体の置いてあった所に、白い衣を着た二人の天使が見えた。天使たちは、「婦人よ、なぜ泣いているのですか」とマリアに尋ねた。マリアは、「わたしの主が取り去られてしまったのです。いったい、どこに持っていかれてしまったのでしょうか。分からないのです」と答えて後ろを振り向いた。すると一人の人が立っていて、また、「婦人よ、なぜ泣いているのですか。だれを捜しているのですか」と尋ねた。マリアは、それが、その庭師だと思って言った。「あなたがあの方を運び去ったのであれば、どこに置いたのか教えてください。わたしが、あの方を引き取ります。」でも、その人は庭師ではなかった。イエスだったのである。彼は、「マリア」と言った。それは、いつも彼女に呼び掛けるあの方の同じ声、同じ口調の懐かしい呼び声だった。彼女ははっとして振り向いた。「先生！」と。この人は確かにイエスだった。本当に復活して下さったのだろうか、また、消えてしまうのではないだろうか。彼女は思わずイエスの足にすがりついた。けれども、イエスはこう言った。「わ

たしにすがりつくのやめなさい。私が復活したこと、そして、また『わたしの父であり、あなたがたの父である方、また、わたしの神であり、あなたがたの神である方のところへわたしは上る』と言ったことを他の弟子たちに伝えなさい。」マグダラのマリアは弟子たちのところへ行って、「わたしは先生に会いました」と告げ、また、イエスから言われたことを伝えた。そして、その時から、彼女はイエスの復活とイエスの救いの御業を告げ知らせる使徒となったのである。

注

- 1 遠藤周作「マグダラのマリア」『聖書の中の女性たち』（講談社、1983）、p. 73.
- 2 遠藤、p. 74.
- 3 遠藤、p. 75.
- 4 遠藤、p. 76.
- 5 遠藤、p. 76.
- 6 川村貝子「マグダラのマリア愛と情熱と信仰の女」『聖書に生きる女性たち』（新約編）川村貝子、横山麗子、石塚八重共著（東京：一粒社、1983）、pp. 155-157.
- 7 “I don’t know how to love him,” lyrics by Tim Rice, in *Jesus Christ Superstar* (1973).
- 8 Cf. 岡田温司『マグダラのマリア エロスとアガペーの聖女』（中公新書、1781）など。
- 9 “Homilia 33.1,” in Sancti Gregorii Magni, *Homiliarum in evangelia*, Lib. II (Oeniponte : Libreria academica Wagneriana, 1892), p. 264.
- 10 ただし、「レブラの悪霊」という用例は1箇所であり、すべての重い皮膚病が悪霊に帰されているわけではない。
- 11 Pesachim112b; H. C. Kee の指摘によれば、悪霊という考え方がペルシアから持ち込まれた一方、ヘレニズム世界の医学では占星術が重視されていた。1世紀に薬草についての本『薬学誌』（*De Materia Medica*）を書いたディオスコリデスは、月夜に抜いた草は薬効が高いなどと記している（Howard Kee, *Medicine, Miracle and Magic in New Testament Times* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1986), pp.45 & 62)。ここでのラビたちの、月の影響と悪霊の働きの相乗効果を考える思想には、その両者の影響が見られる。
- 12 Herbert Danby, “Introduction,” in Herbert Danby trans., *The Mishnah: Translated from the Hebrew with Introduction and Brief Explanatory Notes* (London: Oxford Univ. Press, 1933), p. xiii.
- 13 Cf. Wilhelm Bacher, “Talmud,” in *Jewish Encyclopedia: A Descriptive Record of the History, Religion, Literature, and Customs of the Jewish People from the Earliest Times to the Present Day*, vol. 12 (New York & London: Funk & Wagnalls, 1906), p. 1.
- 14 E・モルトマン＝ヴェンデル『イエスをめぐる女性たち：女性が自分自身になるために』大島かおり訳（新教出版社、1982）、p. 114 も、マグダラのマリアは重い精神疾患から癒されてイエスの信託者となったと見ている。
- 15 アン・グレアム・ブロック『マグダラのマリア、第一の使徒—権威を求める闘い』吉谷かおる訳（東京：新教出版社、2011）、p. 15.
- 16 モルトマン＝ヴェンデル『イエスをめぐる女性たち』、pp. 126-127; E. S. フィオレンツァ『彼女を記念して』山口里子訳（日本キリスト教団出版局、1990）、p.424-427；ブロック『マグダラのマリア』、pp. 103-146.
- 17 K. L. King, G. W. MacRoe, R. McL. Wilson & D. M. Parrott introd. & tr., “Gospel of Mary Magdalene,” James M. Robinson ed. *The Nag Hammadi Library*, paperback, revised ed. Leiden: Brill, 1978, 1988.
- 18 G. R. S. Mead tr, *Pistis Sophia* (1896; revised second edition, London: J. M. Watkins, 1921), p. 47; フィオレンツァ『彼女を記念して』、p. 426.